



本をつくる楽しみ

会員

小澤 英明< 32 期 >

昨年2月、伊豆の川奈ホテルを本田広昭氏（オフィスビル総合研究所代表）と訪ねた。本田氏がパソコンのキーをたたいている間、私は河津桜が満開の広い芝生の庭を散策した。私も執筆に加わった歴史的建造物に関する本「日本の駅舎とクラシックホテル」を昨年出版したのだが、本田氏はいわばそのプロデューサーであり、企画から執筆者の人選、出版社との交渉等をすべてとりしきった。これは、写真家の増田彰久氏の美しい写真を中心にした本であり、すべての原稿がやっと揃ったところだった。その本のはしがきを、掲載された写真の中でもひととき魅力的なこのホテルのラウンジで書きたいと本田氏がい出して、私がおつきあひしたのである。ホテルの展望台に立つと眼下に真っ青な相模湾が広がった。地球が丸いことを実感させるほどの海の広がりを見ることができる絶景で、建築した大倉喜七郎の得意を思いやった。

昨年3月、松山市の萬翠荘の名で知られる建物（写真参照）を本田氏と訪れた。この建物は、久松伯爵（第15代松山藩主）の館として大正11（1922）年に建てられた。本の中で、私は、架空の「モルフォホテル」という歴史的建造物の取り壊し騒動を書いたのだが、姿だけが私の作り話のモデルとなった萬翠荘は松山市民に愛されて大切に保存されていた。期待に違わぬ優美な建物で、現在は愛媛県美術館分館として利用されている。私たちは、最も美しく見えるポイントと思われる向かいの全日空ホテルの最上階のレストランで昼食をとりながら、この建物を楽しんだ。俊才、木子七郎の設計である。木子のもうひとつの代表作の愛媛県庁も訪れた。これまた傑作であり、手入れも行き届いていた。

昨年5月にこの本は出版された。出版を記念して、シンポジウムを開いた。共同執筆者の建築史家の鈴木博之東大教授と増田氏、建築探偵団で著名な藤森照信東大教授、それに私の4人がパネリストとなって、阿川佐和子



松山市・萬翠荘の前で

さんがコーディネーターをつとめた。当日は阿川さんの軽妙なつつこみと、藤森氏の天然ぼけで、立ち見も出た会場は大いにわいた。壇上で唯一無名の私には阿川さんから「小澤さんはお仕事で歴史的建造物についてよく相談を受けられるのですか」というしごくもったもな質問があった。「いや、全然ありません」と答えると、「それじゃ、どうしてここに座ってらっしゃるの?」とつつこまれ、会場からどっと笑いがおきた。

もともと建物や都市が好きで、仕事を離れて同好の人々につきあうことが多い。本田氏は、その1人で、すでに3冊一緒に本をつくっている。私たちは本をつくる過程をできるだけ楽しむことにしている。何もないようなところから何かが生まれるのを見るのは楽しい。もともと、本づくりの楽しみは、本ができた後にもある。友人や知人の感想もうれしいものだが、やはり義理やお世辞もあると思うから、特にうれしいのは、書評や見ず知らずの人からの感想のお手紙である。たとえわずかな人ではあっても、私の書いたものに共感して読んでくれた人がいると知ったときは、本づくりの幸せを感じるときである。